

建築家の檻



連載 3

Grasshouse

エレベーターの扉が開くのを待っていると、外からぞろぞろと社員が入ってきた。十人近くいるので箱に乗れるだろうかと思っていると、どこかで見た顔があった。『一社一丸、報恩道』の襷をかけて舗道を掃除していた連中だった。

つまり、あの道路清掃のボランティア部隊は、丹下建設の社員だったのである。地域社会への奉仕活動というわけか。

どの顔も、やりきれないといったような顔をし、ぶつぶつと私語を交わしている。

「今度はパソコン目安箱制度の導入だってよ」

「何それ？」

「パソコンから直接総務部に密告できるというシステムさ」

「いいかげんにしてよ、馬鹿みたい」

「ダメよ、聞かれるわ。ここにも隠しマイクあるはずよ」

「構うもんか。いつでも辞めてやる」

「誰が言い出したんだよ、そんなの」

「どうせ、女帝様だろ」

「その理由がふるってるぜ。ウチは自由な社風だから、社員の提案を直接トップにいえるシステムが欲しいんだって」

「本音は社員をお互いに、監視させようってんだ」

「自由で明るいのは、丹下ファミリーだけ」

「営業の沼田なんて、ほとんどスパイだもんな」

——僕は窮屈なエレベーターの箱の中で、目を伏せて聞き耳を立てていた。

「それどころか、社墓の企画すら出てるんだぜ」

「シャボ？」

「丹下建設従業員の墓だよ」

「どうせ丹下不動産が儲けるだけの話さ」

「死んだ後まで、奴らに奪られるぜ」

「『一社一丸、報恩道』ってね」

「ああ、厭だ厭だ」

いまいまげな舌打ちが聞こえた。

服装の違った僕に気づいてか、話に夢中になっている社員を指でつつく者がいた。その途端、会話が止まった。会社の雰囲気は、あまり自由ではないようだ。

この建物全体の与える重苦しい圧迫感は、息苦しい社風から来ているのかもしれない。エレベ

ーターが三階で止まり、社員はむっつりと押し黙りながら出て行った。

扉の向こう、廊下の奥の広いフロアには、コンピュータや、整然と並んだ机、明るい窓などが一瞬見えた。

彼らが出て行くと、大量の書類を抱えた若い女子社員が、新たに二人入ってきた。さきほどの受付嬢と同じつまらない紺色の制服を着て、ひそひそ声で話している。天井から静かにバロック音楽が流れている。

彼女たちは入ってくる直前まで、私語を交わしていたようだが、僕が外部の人間だと気づいた途端、さっきと同様に話が止まった。

気まずい雰囲気の中で彼女たちは両手を後ろで組み、口を結んですまし顔でエレベーターの明るい天井を見上げている。このビルの内部ではどこにいても、この冷淡な重苦しい空気に付き纏われるらしい。

エレベーターが五階に到着すると、二人は顔を伏せるようにして出ていった。

扉が静かに閉じたとき、エレベーターの床の隅に二、三枚の伝票が落ちているのに気がついた。大変だ。彼女たちのものに違いない。

僕は紙片を拾うと、次の階で開いた扉を慌てて閉じ、下の五階のボタンを押した。

しばらくして扉が開くと、病院のように長い廊下が現れ、覗いてみるとのっぺりとした床がどこまでも鈍く光っていた。廊下の角の隅には、やはり監視カメラの冷たいレンズがこちらに向いている。

右奥下には、暗くひっそりとした階段が見えた。何かとんでもなく場違いな空間に紛れ込んできた気持ちになり、不安になった。彼女たちは、いない。

と、いきなり廊下じゅうが割れるような音がした。大きな灰色のものが、向こうの通路を通り過ぎていった。

「犬だ……」

そう直感した瞬間、白くて大きなふわふわの獣が、かん高い声で吠えながら、こちらに向かって走ってきた。堅い床に爪を弾かせ身をうねらせると、犬は急に巨大になって、飛びかからんばかりになった。

ボルゾイ犬というのか、頭部がひどく小さくて、からだの異様に大きな犬である。貴族的な印象だが、いささか鼻持ちならない犬だ。銀白色の巻き毛が、全身を豪華に覆っていた。犬の黒い眼と僕の眼とが、ぴったりと合った。犬は低く唸り、前脚を屈め、力を込めて、伏せた。

僕は慌てて逃げ出し角を曲がり、手前の『仮眠室』と表示された部屋の扉を、思わず開いた。もう自分がどこにいるのか分からなくなっていた。

まったくこの軍艦のような建物の内部は、ぜんたいの構造がさっぱりつかめない。

部屋の中は、やや薄暗く病室のように見えた。廊下よりも温かい。

奥には、巣箱のように上下に組まれた簡易ベッドが並んでいた。その蜂の巣のようなベッドの手前に、ヨーロッパの王侯の持ち物のような豪華で巨大な寝台があった。精巧なレリーフの彫られた金色の柱が四本立っており、複雑な刺繍のついたレースの垂れ幕が、四隅を覆っているのだ

。

唐突過ぎて、まるで芝居の大道具のようだ。

蒼銀色に光る掛け布団に、薔薇色の大きな枕。テレビ番組でこれと似たようなものを見たことがあった。ライン河沿いにある古城で、王様が使用していた凝った造りの寝台である。

この巨大な寝台の真ん中には、太った血色のいい赤ん坊が這い這いをし、こちらを見上げていた。すぐ脇に、社員らしき男が中腰でしゃがんでいる。

「晴臣さま、いけません。そちらへ行っては、危のうございます」

男はそう言って、むっちりとした赤ん坊を抱きかかえると、顔だけこちらに向けて、「誰だね、君は？」と鋭く言った。

「いえ。あの、犬がいたので」僕はどぎまぎした。

男は、赤ん坊のお守り役をしていたようだ。

無理に作っていた笑顔が、急に凍りついたような顔になった。ワイシャツ姿の彼は、サラリーマンが飲み屋でよくそうやるように、ネクタイを片方の肩に上げている。

(この赤ん坊も、丹下一族だろうか)

「うちの社員じゃ、ないな」

赤ん坊を豪華ベッドに降ろすと、男は僕を値踏みした。

「何でまたこんなところに、犬がいるんですか」

「そういう問題じゃない。君は誰かね。許可なしに、勝手に入ってくるんじゃない」

吐き捨てるように男は言うと、むずかりだした赤ん坊に向かって、中腰になって「バー」をやった。

肩のところで両手を小さく握ってニコニコ顔を作り、「晴臣さま。バー！」とやるのだ。

涎にまみれた赤ん坊はたちまち喜び、金の柱に囲まれたベッドの上で、むやみやたらに、這い這いを始めた。このふてぶてしい生き物には、どこか虎やライオンなどの猛獣の子のような逞しさがあった。

ふっくらとした柔らかいベッドのあちこちが、大きく窪む。赤ん坊はハムのように肉付きのよい短い手を上げ「チャカマ、チャカマ」と言った。

「あいあい——。佐久間はここにいまちゅよ。チャクマはここに、いまちゅからね——」

ワイシャツ姿の男は、佐久間という名前らしい。彼は垂れ落ちてきたネクタイをもう一度肩にあげると、深い皺を刻んだ額を手の甲で拭い、ふーっとため息をついた。

横顔には、五十年ほどの人生の労苦が刻み込まれていた。こんな姿でなければ、温厚で教養あふれる口マンズグレイといった紳士だった。

彼はもう一仕事というふうに、両手を軽く握りながらあられもない笑顔を作り

「バー。佐久間でちゅよー。バー」とやった。

すると赤ん坊は有頂天になり、涎をワイシャツに押し付けながら、「チャカマ、チャカマ、あいぎゃあ」と訳の分からないことを言ってはしゃぎ出した。

猛獣の子は、喜々として興奮し、手のつけられないほど暴れだした。

佐久間氏は、僕の呆れたような視線に気づくと、ぴたりと笑顔をやめ、

「何見てるんだね。用がないのなら、さっさと出て行き給え」と事務的に言った。

それから「分かった。犬だな」と言い、いかにも油の乗り切った有能な社員のように両腕をまくり直し、大股で部屋の外に出た。怖る怖る僕も外に出る。

廊下を見渡すと、指で小さく輪っかを作って、短く口笛を吹いた。たちまち床を爪で蹴る音がして、白い大型犬が踊るように現れた。こちらはこちらで厄介そうだ。

「おうおう、フェルディナンド様。ごきげんよろしゅう。おうおう」

佐久間氏は、眼を細めて犬の小さな頭部を抱きしめた。犬は桃色の湯気のたちそうな舌を、だらりと垂らした。彼は小さく口を開けて、犬の耳を優しく噛むような仕草までした。

「人間の方が、犬をなめている」僕は思わず顔を顰めた。

仕事ならば、桃色の犬の舌が頬に触れるのも厭わないらしい。

部屋の中で、放っておかれた赤ん坊が激しく泣き始めた。シーツの隙間にもぐりこんでいたボールペンのキャップを、口の中に入れてしまったのだ。

佐久間氏は、大型犬をそこにお座りさせたまま、赤ん坊の口腔に指を突っ込み、赤いキャップを取り出すと、やっと安堵したような表情に戻った。案外、馘のかかった仕事なのかもしれない。彼は犬の首輪を握ったまま、半開きのドアの隙間から僕を睨んだ。

きまりが悪いのか、さも不愉快そうに「早く行くんだ。なに、得意そうな顔をしてるんだね」と言い捨てて、ドアを閉めた。

結局、女子社員は捕まらず、十階に戻った。伝票は後で、さっきの受付嬢に渡しておけばいいだろう。

そんなわけで小会議室のドアをそっと開けると、もうそこには何人もの男たちが、長い会議テーブルを前に座っていた。

僕が入ってきた途端、メンバーは一斉にこちらを振り向いた。鋭く問い詰めるような眼。二、三のわざとらしい咳払い。

それにしても人数が多過ぎる。十数人はいるだろう。仄暗い会議室に座っている男たちは、ワイン貯蔵庫に並んだ樽のように見えた。年格好からすると幹部クラスだろうか。異様に厳肅な雰囲気の中に、どこか一点を突くと途端に壊れて爆笑を誘うような妙な緊張感があった。

だいたい僕の仕事などは、丹下会長の『自分史』のゴーストライターという、きわめて個人的な作業なのだ。何も企業の社史を編纂するわけではないし、せいぜい本人とその秘書が立ち会えば、それで済むはずではないか。

しかしこれではまるで、法廷にでも立たされている気分だ。

重苦しい空気の中、どこからか「フンフンフン」という小さな鼻歌らしきものが聞こえていた。もっとも誰も気にしていないらしい。

「君、ずいぶん時間がかかったじゃないか」

テーブルのいちばん奥にいた厳しい顔の男が、わざわざ人差し指で腕時計を指差しながら、鋭くいった。どこかで見たような顔だ。下の舗道で朽葉を掃いていたボランティア隊のリーダーだった。例のインド人の物理学者ふうの男である。やはり幹部らしい。女子社員の落とし物を届け

ようとしていたなどという言い訳は、通用しにくい空気だった。

「申し訳ありません」僕は慎妙に頭を下げた。

(まいったなァ最初から。服装もラフ過ぎたかな。ネクタイの色も明るすぎる)

「あなたが羽木務さん？ どこで迷っていたのよ。ちゃんとやる気があるのかしら。日にちも間違えてくれるし」

突然、中年女の甲高い声がした。強い語気に、座が凍った。

これで全員が改まったような顔になったので、その影響力の程が部外者の僕にも分かった。

彼女は五十歳前後ぐらいの年齢で、室内にいるのに銀色の襟の毛皮のコートに身を包んでいた。口をへの字に結び、ヒトラーが演説する時のように、片手をテーブルまで斜めに延ばし、傲然とむやみに顔を反らしていた。

「いえ、その、ちょっとした手違いがありまして」

日程については僕の責任じゃない。

「言い訳はいいの、言い訳は！ 男らしくないわねえ。この子も使えないんと違う。若ければいってもんじゃないわ。これじゃあまた、不安だわねえ。とにかくお父さんの自分史は、わたしがしっかり監督させてもらいますからね」

お父さん——つまり、丹下会長の娘なのだ。

なるほど色川さんが言ったように、娘も独特の鉤鼻をしている。この薄い眉に鉤鼻というのが、この同族会社を牛耳っている一族の特徴なのだろうか。

あっけにとられていると、並んでいる老人たちの薄暗い顔が、みな僕を不審そうに見ていることに気がついた。第一印象で、もう落第してしまっただろう。

「いや、やはりその件は広報が担当するので」

僅かな沈黙の後、例のインド人の物理学者の幹部が、苦しそうに言った。

「あなたは黙ってらっしゃい、伸雄さん。あの辛島とかいうジャーナリストを連れてきたのは、あなたのミスじゃないの。お父さんのインタビューにかこつけて、談合だの政界人脈だの、根掘り葉掘り余計なことを。まったく何を取材に来たんだか。関心の持ち方が下種なのよ。ハイエナ同然ね、ああいう連中は。……そう言えばあなた、朝のお掃除、苦情があったわよ。通行人の邪魔になったんですって。築地署の方に、通報があったらしいわ。丹下建設の副社長みずから社員を指導していて、何をやってるのよ。あたしご近所に、恥ずかしいったらありゃしない」

まるで主婦の感覚だ。それはいいとしても「インド人の物理学者」は幹部どころか、副社長なのだ。しかもこの二人は夫婦らしいではないか。婿養子の副社長とは、つまり彼のことなのだ。

しかし副社長がボランティア隊の監督をするなんて、しみったれた企業だ。

「しかし、会長の自分史となると、やはり広報担当ということで」

ハンケチで額を拭いながら、副社長の伸雄氏は話題を戻した。

「いいえ、いいえ。父の自伝は、あたしが見ます。いちばん分かっているんだから。あんたたちがマンションやダム建設に詳しいように、あたしが一番、お父さんのことには詳しいの。それにここだけの話だけど、お父さん最近、ますます突拍子もないことを言い出すようになってるじゃない。怖いわよ、放っておくと。フッ、広報の市村さんじゃ、レベルが低すぎます。あなたは

ねえ、伸雄さん。注文取りと調整だけやってくれてればいいの。こういう芸術的センスはないんだから。ねえ、谷田部先生」

女は媚びるように、横を向いた。

「ははは。専務には、かないませんな。それはもう、こういうことはやはり専務が、うってつけと申しますか、適材適所と申しますか、ははは」

隣に座っていた穏やかそうな紳士が、喉の奥から絞り出すような上品な声で笑った。

「義彦、あんたはどう思うの？」

いままで居眠りしていたような顔をした若い男が、眼を擦りながら「何？」と言って顔をあげた。いかにもお坊っちゃん風の若者だが、着こなしはイタリアンファッション風である。隣の古参の幹部に耳打ちされ、質問を理解すると「ええ、まあ。専務担当でいいと思います」と同意した。昨夜は遅くまで、六本木あたりで遊んでいたという顔つきだ。

「ネクタイがずれてるわ、義彦。ママが直してあげる」

女専務はつつかと息子の脇に来ると、中腰になって、すぐさま結び直してやった。家老のような重役連中は、それをいかにも好ましいことのように、微笑を浮かべて見守っている。まだ大学を卒業したかどうかという年齢だろうが、これではマザコンではないか。

「さてと。ところで社長のご意見は、どうかしらねえ？」

女専務は、からかうような口調で言った。社長などどうでもいいといった扱いを、わざと他の重役連中に披露しているように見えた。

「あ、いいんじゃないの」

俯いて爪先をいじっていた顔の大きな男が言った。この人物こそさっきから、フンフンフンという鼻歌を発していた張本人なのだ。天井を見てにやにやしたり、鼻の脇をぽりぽりと搔いたりして、これで本当に社長なのかと思う。大柄で、会議室の光の加減のせい、眼の色が水色がかって見えるので、外人のような印象だ。

絶えず小刻みにからだを動かし、会議室の重苦しい雰囲気の中、なぜか子供のように楽しげであった。「いいんじゃないの、それでね。うん」

鉤鼻の女専務は、当然でしょ、とでも言いたげな侮蔑的な含み笑いを浮かべ、再びお気に入りの温和な老人の方を向いた。

「そういえば谷田部先生。先生の建設省の同期の方で、原島建設に行かれた村岡さん。ほら昨年、帝国ホテルのロビーでご紹介して頂いた方。あの方もまだ、例の俳句の会に参加されていたっしょるのかしら」

「は、竹林会でございますか。もちろんでございます。あの会はですね、御蔭様でそれはそれは、近年ますます盛況でございます。実は先日も私……」

老人は目を細めながら、畏まって何度も専務に頷いて見せた。永い間、世間でさしたる苦勞もなくおいしい汁を吸い続けてきたので、自ずから温和な顔が実ってしまったという顔つきだ。誰かに似ている。昔のフランスの作家アンドレ・ジイドだ。高校の頃、文庫本で読んだことがある。ジイドをもっと俗にして、にこやかにさせた印象である。

他の老人連中もその間、いかにもその尊い会話を一緒に興じているかのように微笑んでいた。

あるいは温泉にでも浸かっているように腕を組み眼を閉じ、じっと退屈に耐えている者もいた。おそらく谷田部先生と呼ばれる男は、建設省天下り組で、丹下建設の顧問か何かの口を与えられているのではないか。

「会長が、いらっしゃいました――」

秘書の女性が会議室に一步入り、宣言するように言った。王様の入場を告げるトランペットが聞こえてきそうだ。

その一言で、あたりに静電気でも走ったように、全員が姿勢を正した。椅子がガタガタと鳴り、国旗掲揚でもするように皆背筋をぴんと伸ばし、直立した。

僕も隣の人物にきつい視線で促され、立ち上がらなければならなかった。

ようやく最後になって、毛皮のコートの女専務が、威厳を見せつけるかのように、おもむろに起立した。

(続く)

4章 <http://p.booklog.jp/book/97734/read>